

千葉市感染症発生動向調査情報

2020年 第35週 (8/24-8/30) の発生は？

1 定点報告対象疾患(五類感染症)

報告のあった定点数	35週	34週	33週	32週
小児科	18	18	15	13
眼科	5	5	3	4
インフルエンザ*	28	28	22	21
基幹定点	1	1	1	1

上段:患者数

下段:定点当たりの患者数

「定点当たりの患者数」とは
報告患者数/報告定点数。

定点	感染症名	千葉市					千葉県
		注意報	8/24-8/30	8/17-8/23	8/10-8/16	8/3-8/9	8/17-8/23
			35週	34週	33週	32週	34週
小児科	RSウイルス感染症		0	0	0	0	0
	咽頭結膜熱		1	0	0	0	3
	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎		4	7	5	3	96
	感染性胃腸炎		21	26	17	32	184
	水痘		3	2	1	1	12
	手足口病		2	6	2	0	16
	伝染性紅斑		0	1	0	0	2
	突発性発しん		15	10	12	12	42
	ヘルパンギーナ		0	3	0	1	11
	流行性耳下腺炎		1	0	1	1	9
インフル	インフルエンザ*(高病原性鳥インフルエンザを除く)		0	0	0	0	0
眼科	急性出血性結膜炎		0	0	0	0	0
	流行性角結膜炎		0	0	2	0	6
基幹定点	細菌性髄膜炎 (髄膜炎菌性髄膜炎を除く)		0	0	0	0	0
	無菌性髄膜炎		0	0	0	0	1
	マイコプラズマ肺炎		0	0	0	1	1
	クラミジア肺炎 (オウム病を除く)		0	0	0	0	0
	感染性胃腸炎 (ロタウイルスに限る)		0	0	0	0	0

★★:流行中 ★:やや流行中 ◎:増加 ○:やや増加 →:変化なし ↓:やや減少 ↓↓:減少

2 全数報告対象疾患(40件)

※新型コロナウイルス感染症33件は数のみ

病名	性	年齢層	診断(検査)方法	病名	性	年齢層	診断(検査)方法
結核	男性	20歳代	IGRA検査	侵襲性肺炎球菌感染症	女性	10歳未満	病原体の分離・同定
結核	女性	40歳代	IGRA検査等				
結核	女性	80歳代	画像診断等	百日咳	男性	10歳代	抗体の検出等
急性脳炎	男性	10歳未満	高熱及び中枢神経症状	新型コロナウイルス感染症	男女	10歳代~70歳代	病原体遺伝子の検出
侵襲性インフルエンザ菌感染症	女性	80歳代	病原体の分離・同定	-	-	-	-

・第35週は、結核3件(100)、急性脳炎1件(7)、侵襲性インフルエンザ菌感染症1件(1)、侵襲性肺炎球菌感染症1件(4)、百日咳1件(10)、新型コロナウイルス感染症33件(417)の発生届があった。

※ ()内は2020年の累積件数。但し、累積件数は速報値であり、データが随時訂正されるため変化します。

定点当たり報告数 第35週のコメント

過去10年の同時期と比べると、突発性発しん以外は全て平均未満又は報告無しとなっている。

＜突発性発しん＞第26週をピークとして上下しながら減少傾向となっている。第35週は前週より増加し、過去10年の同時期と比べるとほぼ平均レベルとなった。区別の発生状況は、若葉区で最多で、同区の2歳で最も多く報告があった。他に花見川区、緑区で過去10年の同時期と比べて多かった。

<トピック>

<侵襲性インフルエンザ菌感染症>

第35週に今年初めて侵襲性インフルエンザ菌感染症(HID)の届出が1件ありました(2020年の累積数1件)。

侵襲性インフルエンザ菌感染症は、インフルエンザ菌(*Haemophilus influenzae*)が髄液又は血液などの無菌部位から検出された感染症をいいます。

2013年の4月からインフルエンザ菌莢膜b型株(*H. influenzae* type b:Hib)に対するワクチンの接種開始により本症の発生が著しく減少したことから、これ以降届出のあったHIDはHib以外によるものと推察されていますが、血清型は確認されておらず、不明です。

2020年第34週までの全国の発生届累積数は188件で、過去7年の同時期と比べるとほぼ平均レベルとなっています。都道府県別では、大阪府(22件)、愛知県(21件)、東京都(19件)の順で多く報告されています。千葉県(6件)は全国9位となっています。

侵襲性インフルエンザ菌感染症が五類の全数把握対象感染症と定められた2013年4月以降2020年第35週までの千葉市における届出は20件で、その推移は3年ごとに増減を繰り返しており、また、季節的な偏りは見られませんでした。男女比は、男性(12件:60%)女性(8件:40%)となっています(図1)。年齢階級別では、0歳代(5件:25.0%)の他、70歳代(4件:20.0%)及び80歳代(5件:25.0%)が多く、70歳代以上は全体の45.0%を占めています。病型を、髄液から菌が検出されたものを「髄膜炎」、血液から菌が検出されたもののうち、肺炎を伴うものを「肺炎」、そうでないものを「菌血症」として分類すると、肺炎(12件:60.0%)、菌血症(7件:35.0%)、髄膜炎(1件:5.0%)でした。年齢階級別で見ると、髄膜炎の1症例は60歳代で、0歳代と70歳代では肺炎の割合が、80歳代では菌血症の割合が高くなっています(図2)。髄膜炎は2014年に1件報告されていますが、以降報告されていません。近年は肺炎が多くなっています(図3)。

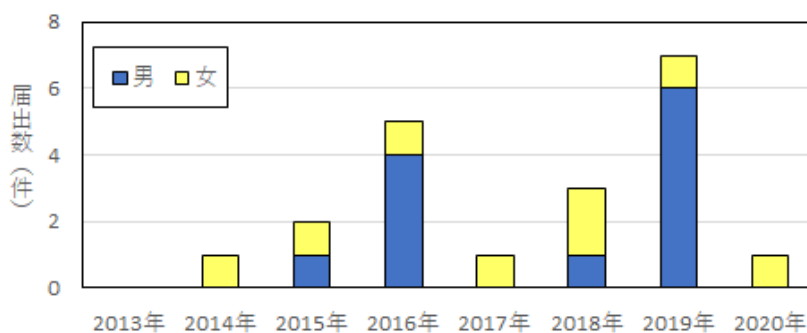


図1 届出数の推移 (2013年～2020年第35週 n=20)

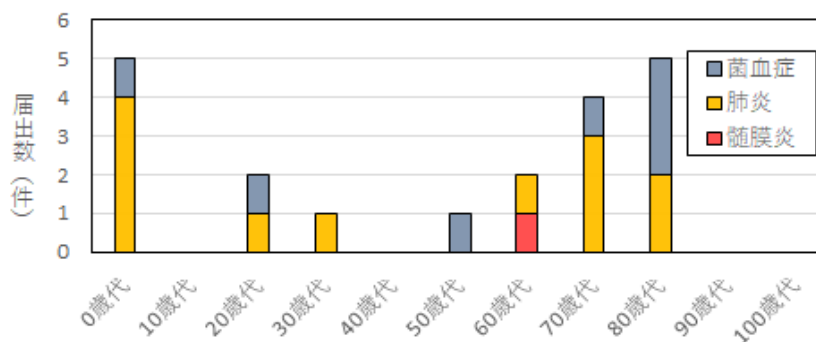


図2 年齢階級別・病型別 (n=20)

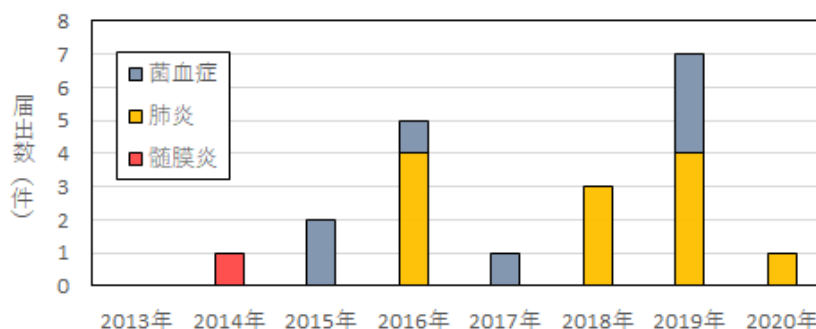


図3 病型別の推移 (n=20)